

ブーゲンビルに兄は還らず

第二次世界大戦が終わり、一応世の中は落ち着いたかのように見え、世界各国もそれぞれ平和を掲げて努力してはいるが、一部ではまだ戦争の根が絶えず、次々と問題が浮かび上がり収まる所を知らない。でも為政者は過去の独裁を反省し人々の大いなる声を聞きながら、しっかりと国民を指導して欲しいものである。かの戦争で多くの人がお国のためにと尊い命を捧げ、他の国民も大きな犠牲を払い、必死で戦い抜いてきた貴重な体験を、どうか後世に伝え残し、より平和な世界に繋がっていく事を切に願ってやまない。

戦後の五十余年

悲しみを越えて

福島県 芳賀 恵 子

戦争は残酷でありました。時がたっても忘れられること
はできないものです。

終戦五十周年を越え、往時をしのび感慨がこみ上げ
るものがあります。夫が入隊し、遺骨が帰るまでを回
想し、歌をかき綴ったものであります。

村松連隊へ入隊

今日よりは 願みなく大君の

しこのみ楯と いでたつわれは

「今日からは死せるものと思つて下さい」。決意の
言葉を残して、夫は昭和十七年九月五日、新潟県村松
の歩兵第五十八連隊に補充兵として入隊しました。

当時、夫も私も村の小学校の教師をしていました。

家族は、九十二歳の祖父と義父（六十五歳）、義母
（六十四歳）、甥（十一歳）そして一年七カ月の長男の
七人暮らしでした。

夫は誠実沈着、責任感の強い人でありました。ま
た、思いやりのある心のやさしい人で、貧しい児童に
は昼食や学用品はもちろん、衣類などもよく与えてい
ました。音楽や体育を得意とし、学芸会や運動会をは
じめ、若手の教員として学校ではなくてはならない存
在でありました。南支で日語学校の教鞭をとり、学芸

会に部隊長殿（井上大佐）からお褒めの言葉を賜ったという便りがありました。在りし日をしのぶ懐かしい思い出であります。

かくして夫は、恵まれた環境の中で、祖父の名に恥じない立派な教育者になることを目指して励んでいました。家庭は平和で、私達は幸福な日々を過ごしていましたが、夫の入隊となったのであります（当時は既に大東亜戦争も始まって、九カ月も過ぎていました）。

十月になって義母が中耳炎を患い、入院、面会謝絶となりました。私は老人と幼児をかかえ、教員という職務と家事、病院の往復など、生まれて初めての試練にあり、とても筆舌に尽くすことの出来ない辛酸をなめていました。

そんな時、外地勤務を控えての外泊許可で夫は帰宅しました。幼い子供は何も知らず、しばしの時間を父に甘えましたが、外地へ行けば、恐らくはこれが今生の別れになるのであろう重態の母や、祖父のことを思う夫の心中は、察するに余りあったことでしょう。最後の孝行をし、私には「女は弱し、されど母は強し」

の言葉を残して十一月十八日帰隊しました。これが家族との永遠の別れとなってしまったのです。

つかのまの 逢瀬なるかな 吾子は今

父征きたれば 母の手にすがる

演習の 砲づつのひびき こだまして

夕映えのもと 夫を思う

南支派遣軍独立第六十六大隊に転属

南支へ上陸したことを知ったのは、昭和十八年（一九四三）一月三十一日でありました。戦友の復員後の話によると、佐倉連隊で南支方面の部隊へ転属のため編成替えになり、夫は重火器小隊の分隊長として、同年兵の指揮掌握の役になり、十二月十九日佐倉を出発、門司出港、船中で元旦を迎え、昭和十八年一月一日広東上陸、そこで独立歩兵第六十六大隊第三中隊に編入されたそうです。

三月五日から十一月まで、警備地区にある日語学校で教鞭をとり、十二月に学校をやめて、中隊の物品・酒保係となったといえます。その後、中隊指揮班員と

して度々の作戦に参加、軽い足首のねんざをしただけで、病氣一つ負わないで元気に勤務していたというところであります。

家へも、元気な便りが度々あり、家族一同安心していましたが、二週間か、三週間ぐらいで内地へ着いていた便りが、昭和十九年頃から二カ月も三カ月もの日数を要するようになり、そして、その便りもとだえがちとなって、部隊の行動の激しさが推測されました。

昭和十九年七月十九日、サイパン島の玉砕が報じられ、続いて東條内閣の総辞職、日本の戦局にも暗雲が広がり、国民の不安は増し、憂国のささやきが巷に流れ出しました。学校も決戦体制下にあってもその役割は大きく、私は多忙な毎日を過ごしていましたが、夫を思い、日本国の将来を思う、やむにやまれぬ気持ちから、四十キロ離れた大山祇神社へ毎日武運祈願に詣でることを心に決めたものであります。

汽車にゆられて往復二時間、当時はバスはなく、山道往復四時間の徒歩は一日がかりで相当の難業であり

ました。

草いきれ むせぶ山路を 一人行き

君が武運を ひたに祈りぬ

銃後も戦時一色で彩られ、片言しか話せなかった長男も、この頃はめっきり大人びて、兵隊ごっこをしてはかわいい隊長でありました。吾子の成長の姿は何者にもまさる士気を鼓舞するものと思い、戦地へ写真を送りました。

いとせめて 野宮の夢に かよえかし

部隊長気どる 吾子の姿よ

昭和十九年八月以降は、便りはますますとだえがちとなりました。戦友の後日話によりますと、部隊は昭和十九年六月から約一年余は実に言語に絶する苦難で「泥水すすり、草をかむ」生活であったとか。しかも、一日十里（四〇キロ）を行く急行軍で、指揮班伝令としての夫の務めも文字通り困苦難儀で、とても便りどころではなかったということを知りました。

その頃、銃後もまた苛烈となり、本土決戦に備えての体制はますます強化されていきました。

みいくさは 酷寒の野を おおい征く

誰やらの句に身のひきしまる思いで、私は冬になっても武運祈願詣を続けました。雪深い、山また山を越え、炭焼きの人しか通らぬ雪の細道を、女一人で踏破しました。一步足を踏み外せば、丈余の積雪の中に体が埋没する。そんな危険を冒して、必死で祈願に行った勇氣は、我ながら驚き、人間の一念の強さを身をもって体験しました。

昭和二十年三月を境として、戦況はますます日本にとって不利に展開され、敗色は濃厚になって来ました。平和な猪苗代湖畔会津盆地に、B29機が初めて姿を現わしたのは昭和二十年四月十日で、その後には襲撃が頻繁となり、危険なため、武運祈願詣は中止せざるを得なくなりました。便りは一月七日に認められた八十三通目を最後にぶつ切りと切れました。

戦の はげしきという この日ころ

便りとだえて 心さわぎぬ

東京大空襲後は、村に疎開者が日を追って増え、緊

迫の中に誰もが必死になって生きていました。そして、「進め一億火の玉」のスローガンもむなしく、終戦を迎えたのです。

戦病死の内報および公報

終戦後、友人・知人が次々と復員されるのに、夫の消息は全くない。復員関係各方面に問い合わせましたが、「消息不明」というむなししい返事ばかりでありました。

かすかなる 音にも胸は さわぐなり

ただひたすらに 復員を待つ

そんな時、千葉の留守事業部から、昭和二十年十月三十一日調べで、「健在なり」という連絡がありました（十月四日に既に死亡としている）。

しかし、その喜びもつかの間、昭和二十一年六月一日、ついに運命の知らせを受け取りました。復員された戦友の伝言で、戦病死を知った叔父が知らせてくれたのです。

胸が早鐘を打ち、一瞬わたしの体を冷えた刀がつき

抜けました。かけがえのない大きな支えが失われた空白だけが私の心を占めたのでした。

暗く、重い気持ちの中で、ひたすら誤報であつて欲しいと念じつつ、上官や戦友に連絡をとつてお聞きしました。復員の事務が整理されるにつれて、次々に入る情報は、絶望を余儀なくされるものばかりでありました。

時は六月、風爽やかな新緑なのに、家族一同暗い表情で、食事ものどに通らない日々が続きました。

私の悲しい人生は、この時から始まりました。

うつせ世の　にがきさだめは　かなしくも

ついえしえにし　悲しかりけり

すでに亡き　人とは知らず　縫いあげし

着物いただきて　泣き伏しぬわれ

当時の日記は、涙で綴られています。

—その中から—

六・十三　また夢を見る。戦死の知らせを受けたが、それは人違いであった。

六・二十七　また夢を見る。帰還された夢だ。

—略—

夢のつづきが　知りたさん

ねむれで淋し　夜の風

夢よはかなく　なぜさめし

さめては逢えぬ　君なるを

—略—

六・二十七　また夢を見る。元気がなく風呂の中に

沈んでしまわれた嫌な夢。寝てもさめても戦病死

の事が脳裏から去らない

—略—

七・一　今日で学校を二日欠勤する。すべてがむ

なしくなった中で、児童の前に立って教える気力

を失ってしまった。児童には申し訳ない。

倉田留三を読む。その中から。

—前略—

「故に自己の苦痛や悲哀の表出については寡黙の方が高貴な徳と一致する。不可抗力なる運命を勇ましく負うて忍従することは人格の尊厳と力

との静的なあらわれとして尊い。」

—後略—

長い教員生活の中で、こうした理由で欠勤したのは、この時が最初で最後である。当時の悲しみがどんなに深いものであったかを、今改めて思い出します。

円乗隊長殿より戦病死の通知を受けたのは七月十六日で、部隊における行動や戦病死に至るまでのことが克明に記されてありました。

それによると、部隊は昭和二十年三月から、柳州—桂林—長沙と猛進撃（撤退作戦）を続行、夫も指揮班伝令としてこの大作戦に参加していたが、一月十一日、湖南省長沙で粘血性下痢を発し、同二十六日、長沙の第八十四兵站病院に入院、その後、後方の病院に収容され、九月二十六日、上海方面向けの輸送船に乗船したが、輸送中の不良なる条件のため、栄養失調、病状悪化、細菌性赤痢と決定され、十月四日、ついに死亡したとのことでありました。

夫と行動を共にしていた戦友の話によると、夫はそ

れ以前、桂林を出て大溶江口のあたりから肋膜炎の病状を口にし、苦しい中を任務についておったということでありました。病魔に侵されながらも激務に耐え、ついに倒れ、加療しても再起出来なかったことは、かえすがえすも残念であります。

どんなに苦しんだであろう、その四カ月間を想像して、私は断腸の思いがしました。夢にも忘れることの出来ない焦慮と、無念さをどうすることもできず、戦争の無残さがひしひしと身を襲い、やり場のない憤りとくやしきで涙が溢れました。

亡き夫を 思いて仰ぐ 夜半の月

語りかけては 涙溢れつつ

ただせめてもの慰めとなったのは、隊長殿よりの手紙に、「夫は作戦に参加しては、沈着剛胆、機敏なる行動を以て終始上官の信頼を受け、指揮班伝令としてその重責を完うした」との言葉があったことです。誠実で責任感の強い人だっただけに私もそれを信じて疑いません。そして、それが祖国永遠の平和と発展の礎となったものと、今日に至るも信じております。

五年間の陰膳もむなしくこの日で終わり、私はあきらめて祭壇を作りました。

八月五日に村役場より戦病死の公報があり、六月に内報を身にしてから二カ月間は、私の人生で最も苦しい、悲しい日々を過ごしました。しかし、一人息子を奪われた義父母の心中を察する時、悲しんでばかりはいられませんでした。

復員者がどんだん帰郷する。あの駅頭で万歳の旗と軍歌に送られたかつての勇姿は見るかげもなく、汗とほりにまみれて。でも、そんな姿に会おう時、もしやと思ったり、似通った姿にハッとさせられたりしました。

亡き夫の まぼろしを追い 道行けば

復員姿の 人ぞ恋しき

遺骨帰還埋葬

大君の 人にこそ死なめと 征でたちし

夫は声なく いま帰り給う

十一月二十五日に遺骨が交付され、同二十九日に埋

葬を行いました。

敗戦下のこととて限られた条件の下でしかできませんでしたが、木枯が吹く寒い日にもかかわらず、親類、地域の人々、教育関係者、教え子等多数参列、故人の冥福を祈って下さいました。

特筆したいのは、復員以来、家族が最も知りたいと思っていた夫の消息や、部隊での行動をいろいろと教えて下さり、また調べて下さった上官の遠藤知周殿、戦友の田辺陽太郎殿、坂井清正殿の三氏が、列車切符購入が困難な時代に、遠い横浜から、または新潟から、東北の会津までおいで下さり、遺骨を迎え焼香して下さったことでした。冷えた当時の世相にあって、家族一同そのご厚情に非常に感謝・感激をしたものであり、五十余年経った今日でも、改めてお礼を申し上げたい気持ちでいっぱいあります。

当時五歳だった一人息子も定年を迎え、相模原から私たち夫婦の生まれ故郷の会津に戻り、私の老後の面倒を見ておられます。このことこそ、亡き夫が最も望んでいたことではないかと思う日々であります。

月日は流れ時代は変わりましても、いろいろな思い
出は昨日のように鮮烈に甦って来て、忘れようとして
も忘れることは出来ません。部隊で挙行する、毎年十
一月二十三日の慰霊祭は、私は足腰不自由なため、現
在は長男が出席し、夫の戦友、先輩と共々往時を回想
し、夫になり代わり、靖国の社前で慰霊の行事を行
い、夫の冥福を祈ることが、我が家の行事ともなっ
ております。

「女は弱し されど母は強し」

「冬来りなば 春遠かしじ」

失意のどん底から立ち上がり、必ず春の来る事を信
じ、母なるが故に悲しさに耐え、苦しさを乗り越え
て、夫亡き後も教師を続け、夢果たせなかつた夫の弔
合戦のつもりで、教職にある事三十五年、情熱を傾け
てこの道一筋に生きて来ました。その間、多くの方々の
善意に支えられたことを感謝しております。

一祖父は、昭和二十一年十二月、夫のあとを追うよう
に九十六歳の天寿を完了し、義父は二十四年に、義母
は三十四年にそれぞれ他界しました。当時十五歳だっ

た甥が家業を継ぎ、私の二人の孫も成長し、それぞれ
幸せの道を歩んでおります。

亡き夫を　しのびて歩む　穂芒の

ゆらぐ山路に　鳥の羽音す

【解　説】

九十二歳の祖父、六十五歳の義父、六十四歳の義母
と十一歳の甥、そして一年七カ月の長男を残して出征
した夫、芳賀正平さんは、昭和二十年十月四日戦没さ
れた。その間の苦しみ、そして、戦後五十五年、現在
に至るまで、随分の辛苦であられた回想の歌の数々。

二百五十万に及ぶ戦没者の御家族に思いを至す時、
生還し得て今日ある我々元軍人にして、心痛まし、涙
無しでは読み得ない体験記である。

筆者、芳賀恵子さんの夫、正平氏は、解説者たる私
(星澤)の同部隊、同じ部隊に行動を共にした戦友で
ある。

昭和十九年六月、湘桂(大陸打通)作戦が開始さ
れ、広東省、珠江の支流、西江沿岸地区を西進した独

立歩兵大隊の第三中隊指揮班の一員であったのが芳賀正平さんであったのでした。

彼は小学校の教員で、誠実沈着、責任感の強い人でした。指揮班員は、人事・功績をはじめ、中隊の中核であるので、その人選は厳しく、体力もあり、気力も充実し、秘密保持等、兵であっても下士官級の者でないといふ務められぬのでした。

特に作戦中は、連絡下士官と共に、各小隊所在地へ命令の伝達、状況の把握等の任務がある。作戦中各隊は夜間宿営は陣地を構築、敵の攻撃に対処し、あるいは攻撃準備をする。

しかし、その所在を確認し、命令伝達するのである。雨中であれ、陰阻な場所であれ、敵中であれ、単独で行動もしなければならぬ、従って任務遂行は絶対命令である。精神的にも、体力にも、生命の危険を冒しての行動である。

作戦行動中の独立部隊には有線電話も、無線機も十分でなく、連絡下士官や伝令に頼らねばならない。夜中目的地を占領するが、次の命令が来なければ、以

降、明朝の行動を準備することが出来ない。そのような時に、連絡下士官と伝令の芳賀君が、ようやく命令を持って来る。「明晩五時、〇〇地に集合せよ」等の命令書を見て、「これではもう出発準備をしなければならぬ」と、いらだつたことも多くあった。しかし、これが、戦場の常であり、本部指揮班、特に連絡下士官や伝令を責めるわけには行かず、「ご苦労」と言つて出発準備の命令を小隊各分隊に告げたことも、しばしばあった。

そのような時の、芳賀伝令の顔が今でもまぶたに浮かぶのであり、夜中、地図を頼りによく来られたな、と感心をしたものである。そのような心労の連続が一作戦約十日間、距離にして三―四百キロ続いたのである。そして瘴癘の地南支那の戦場で続く、まして、マラリヤ、デング熱、赤痢・チフス等の伝染病蔓延の地である。

芳賀さんも、一年四カ月の湘桂進攻・同撤退作戦により、心身共に傷めつくしての戦病死であったと思う。我が部隊も、二百五十人の戦死・戦傷死、戦病死

者を出しているが、その損耗率は二五パーセントである。

芳賀正平伍長のご遺族は、毎年十一月二十三日の慰霊祭に参列されている。戦没時、一年七カ月であった長男正紀氏は、勤務せる一流企業を定年退職し、両親の故郷、福島県会津若松市にて母君と共に父君の墓碑を守っている。

まさに、「女は弱し されど母は強し」の言葉を守った、母恵子さんのご多幸を、戦友として祈っている。